

# 客家語のいわゆる「操作使役」文について —北京語との対照を含めて—

田中 智子

(東京大学・院)

本文主要论析台湾南部(美浓镇)客家话中与普通话的“操作使役”相对应的使役句式。我们的主要观点是:(一)客家话所谓的“操作使役”根据其前置词“分(bun)”和“同(tung)”的不同可以分成两个语义类型。由“同”引导、并且句中动词由“穿脱类”动词充当的使役句接近于语言类型学中的直接使役,而由“分(bun)”所引导、同时句中动词由“饮食类”动词和“视听类”动词充当的使役句则更接近于间接使役。(二)若以此为依据,我们认为普通话的“操作使役”句也可以分成这样两个语义类型。由“穿脱类”动词构成的“操作使役”接近于直接使役,而由“饮食类”动词和“视听类”动词构成的“操作使役”更接近于间接使役。

1. はじめに
2. 言語類型論の観点からみた使役
  - 2.1. 使役という状況
  - 2.2. 使役構文についての言語類型論
  - 2.3. Shitabani and Pardeshi 2002 のパラメータ
3. 美濃客家語の使役構文
  - 3.1. 美濃客家語の語彙的使役と形態的使役
  - 3.2. 美濃客家語の分析的使役
4. 美濃客家語の「操作使役」文
5. 美濃客家語使役構文の意味的連続性
6. 北京語<sup>1)</sup>の「操作使役」文の再検討
7. おわりに(他の方言について)

## 1. はじめに

北京語の“给”には、次のように一種の使役文と考えることができるような文がある。

(1) 母亲给孩子穿鞋。(楊 1989, 77)

楊1989はこの文が日本語の操作使役に対応するものだと主張している。日本語の操作使役とは、「子供に服を着せる」のようなものである。柴谷1982はこのような文を、使役者が被使役者に直接作用を与える操作使役である、としている。(1)があらわしているのは、母親が子供に指示を与えるという状況ではない。母親自身も子供に手を貸す、という動作を行なう状況である。従って楊は(1)のような文を操作使役と考えるのである。

楊1989, 79は、この「N1給N2 VP」という構文が使役の意味をもつのは、“看”や“听”のような動詞（以下本稿では[視聴覚類動詞]と呼ぶ）、“吃”、“喝”のような動詞（以下本稿では[飲食類動詞]と呼ぶ）、“穿”、“脱”のような動詞（以下本稿では[着脱類動詞]と呼ぶ）が述語に来る場合に限ることも指摘している。

ところが、佐々木2002はこのように介詞“给”を用いた使役文を操作使役とは認めず、「授与使役」という新しい使役のカテゴリを導入している。この両者で立場が違っているのは、言語類型論的な定義からみると北京語の“给”を用いた使役文は操作使役の典型的な例だとはいいにくいからではないかと思われる。

しかし、北京語を詳しく観察してみると、実は、共起する動詞の違いによって、「操作使役」が表す状況が異なっていることがわかる。そして、あるものは楊1989が主張するように言語類型論的な操作使役の典型に近く、あるものは典型から少し離れる、といった状況を見せるのである。

北京語では、この種類の異なる使役をすべて1つのカテゴリにとらえ、どれもが介詞“给”を用いた構文で表される。しかし、方言によってはこれを異なる使役タイプを表すととらえ、それぞれ別の介詞で表す場合がある。

客家語<sup>2)</sup>には北京語のいわゆる「操作使役」に並行的な現象が見られる。しかし客家語の場合は、北京語が「操作使役」であらわすような状況がすべてひとつの介詞を用いて表されるわけではない。客家語では共起する動詞の意味の違い、ひいてはその使役があらわす状況の違いを“tung<sup>2</sup> (同)”と、“bun<sup>1</sup> (分)”という2種類の介詞で表し分けるのである。

本稿では、客家語の使役文（特に北京語のいわゆる「操作使役」に対応する使役文）を詳しく検討し、使役構文が表している使役の状況の違いが、

介詞の違いなどによって明示的に現れていることを示す。

## 2. 言語類型論の観点からみた使役

### 2.1. 使役という状況

Song 2001, 275 は、使役構文は2つの出来事 (event) からなる巨視的な状況 (macro-situation) を表していると定義した。その2つの出来事とは、(I) 使役者がほかの出来事 (引き起こされる出来事) を生じさせるために何かを行うという出来事、そして、(II) 使役者の行為の結果によって、被使役者がある行為を行うか、状態の変化を経験するという出来事である。Song は、使役の定義には、出来事のレベルと参加者のレベルという、2つの異なるレベルも関係すると言っている。出来事のレベルというのは、出来事をひきおこす側の事象と、引き起こされる側の出来事 (結果) の間の関係をとらえるレベルである。参加者のレベルとは、使役者と被使役者という2つの参加者の間の関係に関わるレベルである。実際、意味からみた使役タイプの記述のほとんどは、この2つのレベルを中心に展開している (Song 2001, 275)。

Song 2001, 275-276 はさらに、この2つのレベルにおいては、それぞれ使役タイプの対立があると主張する。まず、出来事のレベル (出来事を引き起こす側の事象と、引き起こされる結果の関係) では、直接使役 (direct causation) の状況と間接使役 (indirect causation) の状況がありうる。そして、参加者のレベル (使役者と被使役者の関係) では、操作使役 (manipulative causation) の状況と指示使役 (directive causation) の状況がありうる。以後、類型論の観点から定義した manipulative causation を操作使役、中国語 (北京語) の分析において使われてきた操作使役という用語を「操作使役」とカッコをつけて記すことで両者を区別する。

ただし Song 2001 の主張では、出来事のレベルと参加者のレベルとは、まったく独立しているわけではない。使役文の表す状況によっては、直接使役的にかつ操作使役的である場合もありうる。

本稿で中心に取り上げる操作使役に関しては、すでに Shibatani 1976 で、次のことが指摘されている：操作使役的な状況では、被使役者は意志的でないといみなされる。使役者は、ある出来事を引き起こすためには、被使役

者を物理的に操作しなければならない。たとえば英語の「John moved the chair.」という文が表しているのは、使役者が物理的に被使役者を操作する、という状況である (Shibatani 1976, 31)。他方、被使役者に意志があり、使役者が被使役者に指示を与えて動作を行わせるという使役の状況は、たとえば英語の「John made Bill move.」のように指示使役で表される (Shibatani 1976, 32)。

## 2.2. 使役構文についての言語類型論

前節では使役という状況に関するパラメータをみた。本節では使役構文、つまり使役文の形態に関する言語類型論を簡単に述べる。

使役構文は、言語類型論的な観点から、大きく次の3つにわけられる (Comrie 1989, 166-171 例は筆者による): (I)「語彙的使役」(例: 日本語の「たおす」、「動かす」、英語の「kill」など)、(II)「形態的使役」(日本語の「倒れサセル」、など)、(III)「統語的 (分析的) 使役」(英語の「make him eat」、中国語の「让他去」など)。

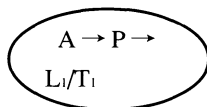
Song 2001, 276 によれば、先に挙げた2つのレベル (直接使役 vs. 間接使役、操作使役 vs. 指示使役) が、さまざまな言語で上記の3つの使役構文のタイプと関係があることが知られている。Song 2001 はまた、操作使役や直接使役は語彙的使役で表される傾向が強いとも指摘している (Song 2001, 278)。操作使役が一般的には語彙的使役で表されることが多いことは、すでに Shibatani 1976, 31 で指摘されている。ただし Shibatani 1976 は、操作使役の状況を表す際に生産的な形式 (productive forms) を使うことが許される場合があるとし、それは次の場合だと述べている: (あ) 動詞がそれに対応する語彙的使役の形式を欠いているとき。または、(い) 語彙的使役構文が許容する被使役者のタイプに制約があるとき (Shibatani 1976, 35)。なお、Shibatani 1976, 35 のいう生産的な形式は、助動詞的な使役動詞を用いる形式も、日本語のように接辞を用いる形式も、どちらをも含む。つまり、生産的な形式とは、形態的使役も、統語的 (分析的) 使役も、いずれもありうる。

## 2.3. Shibatani and Pardeshi 2002 のパラメータ

ここでは、後の議論に関係する Shibatani and Pardeshi 2002 の考え方を紹

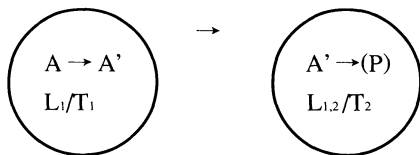
介したい。

2.2 で見たように、従来の類型論的使役構文の研究では使役構文をその形態によって分類した。そして直接使役、間接使役などの意味機能と使役構文の形態との関係が論じられてきた。Shibatani and Pardeshi 2002 は、「直接使役/間接使役」のようなおおざっぱな分け方では定義があいまいであるとし、意味を中心に使役構文を分析している。Shibatani and Pardeshi 2002 が着目したのは、引き起こされた事態に使役者と被使役者がそれぞれどのように関わっているのか、という点である。直接使役の場合は、使役者は動作主者であるのに対し、被使役者は受動者とみなすことができる。例えば、“A kills P.” の場合、使役者 A が動作主性を持つのに対し、P は “kill”、という行為の受動者である。A の行為が直接ある結果を引き起こすのである。さらに、A の行為 (“kill”) が行われる一連の過程と、それによってある結果が引き起こされる (P dies) という一連の過程は、同じ時間帯 (T1)、同じ空間 (L1) で起こる。Shibatani and Pardeshi 2002 は下記のような図式を使ってこれを説明している。



(Shibatani and Pardeshi 2002, 90)

一方、間接使役では、使役者と被使役者の両方が動作主性をもっている。従って、使役者の意図がそのまま実行されるわけではない。まず使役者から被使役者に働きかけがなされてから、ある出来事が引き起こされる。つまり、直接目的語のように使役者の行為からある出来事が引き起こされるまでがひとまとまりではなく、少なくとも時間的に、そして場合によっては、空間的に断絶がある。上記のことを図式化したのが次の図である。



(Shibatani and Pardeshi 2002, 90)

Shibatani and Pardeshi 2002はさらに直接使役と間接使役との間に中間的な使役のカテゴリー、「sociative causative」を提案している。そして、直接使役、sociative causative、間接使役がひとつの連続体を成していると考えられる。sociative causativeとは、使役者と被使役者が一緒に行動する状況を表すような使役文で、使役者と被使役者は両方とも動作主となる。この点では間接使役と同じである。そして多くの場合両者は同じ行動をとる。もうひとつの特徴は、使役者が行為を行う過程と被使役者が行為を行う過程は時間的に重なることである。この点で直接使役の場合と似ている。Shibatani and Pardeshi 2002, 100の考えでは、sociative causativeはさらに3つに下位分類することができる。この分類の基準はやはり、ある出来事を引き起こす事態とその出来事が引き起こされる、という事態が時間的空間的に重なっているか、離れているか、という点である。

Shibatani and Pardeshi 2002のパラメータは、美濃客家語や北京語の分析にそのままあてはめられない部分もある。しかし、(I)さまざまな使役構文を連続体としてとらえる、という点と(II)使役者や被使役者と引き起こされた出来事との関係がどのようになっているか、ということに着目する点は美濃客家語や北京語の分析においても有効で、本稿では上記の2点を踏まえて分析を行なう。

### 3. 美濃客家語の使役構文

本稿で扱うのは、高雄縣美濃鎮で話されている客家語の一方言である。以下、この方言を美濃客家語と記すことにする。美濃客家語の使役構文は語彙的使役、形態的使役、統語的使役の3タイプがあると考えられる。

#### 3.1. 美濃客家語の語彙的使役と形態的使役

語彙的使役はこれまでの調査では適当な例がほとんどみつからない。強いて言えば、「*zo<sup>4</sup>* 載せる (乗せる)」という動詞がある。

(2) *Fi<sup>4</sup>lim<sup>2</sup> ki<sup>2</sup> o<sup>4</sup>do<sup>4</sup>vai<sup>3</sup> zoi<sup>4</sup> ngai<sup>2</sup> hi<sup>4</sup> hok<sup>6</sup>gau<sup>3</sup> o<sup>4</sup>*  
 人名 乗る オートバイ 乗せる 私 行く 学校 語気

【惠琳騎 *odovai* 去學校□<sup>3)</sup>】

「惠琳はオートバイに乗って私を載せて学校まで行ったんだよ。」

